═巻頭文═

「ジャンケン文明論」の出番

湊　晶子

広島女学院大学 学長

21世紀は民族闘争解決の世紀であると言われる。解決の道はあるのだろうか。人は誰でもどこかに帰属したいという欲求が強いので、おのずから民族という集団で固く結ばれ、お互いの緊張関係を生み出す結果となる。世界がますます多極化してきた今こそ、力の文明から対話と寛容の文明へと大きく転換しなければならないと思う。

今から61年前の１９５６年、爆撃による傷も完全に癒えぬ頃、フルブライト奨学生としてアメリカに留学した。丁度公民権運動が始まった頃で、シカゴの街角でキング牧師の演説に聞き入り、ハーバードヤードでは若きケネディ候補の、「民族、人種は異なっても私たちは同じ空気を呼吸して生きていることを忘れてはならない」との熱烈な演説に感動したことを思い出す。

５年７か月のアメリカ滞在で西欧社会の意識構造が「妥協を許さない二元的世界観に立脚している」ことに気付いた。勝負もコインの表か裏で決定する。中道のない「厳しい二元の世界」である。勝敗をハッキリ決める西洋の文化とは違い、ジャンケンには「三すくみ」肯定の思想がある。この「ジャンケン文明論」には、「包む力・寛容の精神」があることに気付いた。バランスを重視する東洋の文化を描き出していると思う。サミュエル・ｐ・ハンチントンが「文明の衝突」を予告した通り、いま、地球上には厳しい民族対立の緊張関係が存在する。文明の対話のために、日本には三すくみのもう一つの対話の糸口を提供する役割が求められていると思う。

新渡戸稲造博士が１９２６年、約６年半の国際連盟事務局次長を辞して帰国するにあたっての送別の辞に、「貴方は、この不寛容な西洋社会に、多くの賜物をもたらされたのですが、中でも特筆すべきは、東洋社会の賢明な寛容さとでも言うべきものでした」とある。また、アインシュタインが１９２２年に40日間日本に滞在した時、「世界は闘争に疲れ果てる時が来る。その時、世界人類は平和を求め、世界の盟主を必要とする。我々は神に感謝する。天が我々人類に、日本という国をあたえたもうたことを」と述べた。

世界がますます混沌として来た今日、日本は「イエスとノー」を明確に「ぶれない個・私」を確立し、その上で「もう一つの道」を国際社会に提供できる教養人を生み出す責任がある。今こそ大学はその責任を果たすべき時であると思う。